



1969年、ドイツでは「民族虐殺の罪には時効を廃止する」と決定しました。第二次大戦のときのヒトラーの悪行を厳しく追及するためです。物事を曖昧にせず、過去の歴史を正確に知らせようとする努力が続けられており、小学校の教科書でもナチス・ヒトラーの残虐行為を多くの写真や資料で教えています。

一方、ドイツをはじめ北欧諸国でも、不況から来る社会全体の無気力感、失業問題が外国人労働者の問題と結びつき、排外主義、右翼的な主張に流される傾向もあり、「ネオナチ」思想による少数政党の台頭が問題になっています。日本の場合は、さらに政治的に無関心で、過去を正確に知らせまいとする社会の動向も存在し、立憲主義の否定、マスメディア支配、客観的な歴史認識を嫌悪し、民主的要素を悉く取り除こうとする、露骨な学校教育法の改悪を強行しようとする右翼化した安倍政権の下でますます危険な方向に進んでいます。最近の内閣改造で女性登用の象徴として、登場した現役総務総と自民党三役の女性議員が、「ネオナチ」思想を表明している「極右活動家」と写真に収まっていた、とのニュースが海外メディアに報道されています。

本号では、安倍内閣が目論む学校教育法の改悪案に関連した高松氏の記事と、集団的自衛権行使容認の「閣議決定」に危機感を感じて投稿された、中村氏の記事を掲載します。

学校教育法・国立大学法人法改悪案について

高松邦夫

安倍内閣が画策する大学の自治を破壊する施策案、“学校教育法・国立大学法人法 改悪案”に反対する。

アジア太平洋 15年戦争を敗戦で終えて3年5カ月余、日本国憲法公布後 2年2カ月余、1949年1月、日本国の学術研究行政の主柱となる日本学術会議が発足した。この間、天皇人間宣言・新円切り替え・極東軍事裁判開廷・ゼネスト宣言とマッカーサー中止令など国内の出来事を並べただけで騒然とした世の中が思い知れる。帝銀・下山・三鷹・松川事件が相次ぎ、レッドパージが吹き荒れた。一方で、1949年末には湯川のノーベル物理学賞受賞のニュースで沸いた。中華人民共和国成立にインパクトをうけた。

日本学術会議第一回総会において、『日本国憲法の保障する思想と良心の自由、学問の自由を確保するとともに、科学者の総意の下に、人類の平和のためあまねく世界の学界と提携して学術の進歩に寄与するよう万全の努力を傾注すべきことを期する』と自身の存立の意義を、総会声明第一号に、高らかに謳いあげた(参考1)。今あらためて声明を読み返して、極めてありきたりの言辞のように響くが、それらは科学者・研究者の心底からの反省の上に、日本国憲法の下、責任の重さを決意として披瀝したものと受け止めることができる。

その8カ月余の後、同年10月第4回総会において、大学の人事及び教授会の権限について、『特に大学においては、学問の研究に関連する教授会の権限が尊重されるべきであって、これが、外部よりする政治的理由によって、左右されてはならない』と声明(参考2)を発し、併せて、時の吉田首相に勧告(参考3)を行った。それから65年余経過した今日まで、この声明の普遍性が失われてい

ないことを知る。この間、しかし、制度面と財政面で政府側から齟齬された大学の自治と学問研究の自由の危機を何度か経験しながら、特に、大学法人化によってそれらが大きく侵害されながらも、市民運動にも支えられ、大学の自治と学問研究の自由を守る努力を科学者は続けてきた。原子力平和利用における三原則―自主・民主・公開―はその努力の上に建てられた強い思いである。

65年の日時は、確かに長く、これらのことを実感できる人達が今は僅くなったかと恐れ、あえて回顧した。重ねて記すが、これら学術会議声明は『これまで我が国の科学者がとりきたった態度について強く反省し』、アジア太平洋15年戦争の総括として発せられたもので、今も真実性と普遍性を失っていない。安倍内閣は、これら学術会議の声明を否定することが出来ないことであるにも拘わらず、戦後レジームの安倍流総決算を呼号し、歴史逆行の途を突走っている。学術行政の戦後再出発を僅かでも知る者にとって、黙過できないことである。

ここで、教授会の持つ特質についてコメントが必要かもしれない。今問題にしていたのは学長の権限と教授会の権限の相関である。一般に、大学の運営に在って、単科大学の総体としての総合大学の歴史を踏まえ、学部教授会の自治の総体が大学の自治を顕すと考え、学長はその集約を担うとされている。しかし、大学の運営に在って、運営に関わる要員は、独り教授であって、その集約が学長であるというのは象徴的な表現であって、大学の自治に在っては、教授とともに大学の他の構成員、即ち、教授以外の教官、院生と学生そして事務官、全ての参加が必要であろう。全構成員参加の自治を体現するのは容易でない。直接的な形で実現した例を知らない。

大学法人化以前に在っては教授会に助教授及び講師が参加する形態が多かった。また、学長選挙

に当たって、大学構成員の考えが反映する形態を採用する大学も少なくなかった。これらは、全構成員参加に可能な限り近づこうとした形態を採った例である。後にも簡単に触れるが、超大型施設を有する自然科学系、あるいは、有機的な関わりを特に必要とする人文・社会科学系全国共同利用研究所(研究機構)は日本学術会議参画の下、全国研究者による運営が求められ、したがって、対応する意思決定機構(自治機能)を有している。戦後、学術会議勧告第1号によって設立された最初の全国共同利用研究所として、東大附置・原子核研究所が田無町に誕生した。研究所の本質的性格から、学術会議に集い、互いにその分野の研究者とする全国研究者の考えの下に運営された。即ち、学術会議の下に各研究分野全研究者から選挙によって選ばれた委員によって運営小委員会(核研小委員会)を構成し、それが運営を司った。この研究所は、本来大学とは独立に、それと並んだ存在のはずであったが、時の文部省が東大附置に固執し、そのように置かれた。このため、東京大学が掲げる大学の自治と、全国研究者による自治の間をどのように折り合わせるか、興味あるせめぎあいのようなものが生まれた。核研小委員会の決定を東大理学部教授会がまるまる尊重することで、勿論、落着いた。この全国共同利用研究所構想は、戦渦で荒廃したヨーロッパ物理学400年の伝統の再興を希って欧州物理研究者の叡智の上に創られた欧州原子核研究機構(INFN)とそれによる大型研究施設を有する欧州原子核研究所(CERN)を手本にしてできたものといえる。欧州原子核研究所は加盟各国の支持のもと、所員には外交官待遇が与えられているのも大きな特権であった。

教授会をあえて持たない国立大学が、他方で、存在する。そこにあっても、しかし、大学運営の自主性と学問研究の自由が瞳のごとく大切であることに変わりがない。機関構成員の全参加の下、可能な協議体を持って運営に当たることを実体化することで、どのような形にせよ、自治の実態を持つことが可能であろう。国立研究機関は設立の趣旨から、国の政治支配をより強く受けている。また、国立大学と異なり、国立研究機関は、直接に学生の教育を行うことを目的にしていなかったため、教授職を置かず、教授会を持つことがないが、それに代わる運営機関を持つことが出来る。状況に従った対応が求められるということになる。筑波にある大型加速器を有する全国共同利用研究所としての高エネルギー加速器研究機構はさきに述べた原子核研究所を母体として誕生した経緯を踏まえ、文科省管轄下に在り、教授職を有する。教授会を持ってはいないが、それに代わる協議体を持ち、研究者の自治を確保している。これは、本研究施設設立にあたって、前身(母体)に当たる全国共同利用研究所としての原子核研究所の運営に倣い、研究者の身分として当時の公務員特例法を準用する研究機関とし、学術会議・原子核特別委員会の下に全国関連分野研究者集団を母体とする研究機構運営委員会を構成し、所内に在っては教授会に相当する研究所運営機関として協議体を構成して

参考1 日本学術会議決意表明 昭和24年1月22日
日本学術会議第1回総会
日本学術会議の発足にあつての決意表明(声明)
われわれは、ここに人文科学及び自然科学のあらゆる分野にわたる全国の科学者のうちから選ばれた会員をもつて組織する日本学術会議の成立を公表することができるのをよろこぶ。そしてこの機会に、われわれは、これまでわが国の科学者がとりこみつた態度について強く反省し、今後は、科学が文化国家ないし平和国家の基礎であるという確信の下に、わが国の平和的復興と人類の福祉増進のために貢献せんことを誓うものである。そもそも本会議は、わが国の科学者の内外に対する代表機関として、科学の向上発達を期し、行政、産業及び国民生活に科学を反映浸透させることを目的とするものであつて、学問の全面にわたるその責務は、まことに重大である。されば、われわれは、日本国憲法の保障する思想と良心の自由、学問の自由及び言論の自由を確保するとともに、科学者の創意の下に、人類の平和のためあまねく世界の学界と提携して学術の進歩に寄与するよう万全の努力を傾注すべきことを期する。
ここに本会議の発足に当つてわれわれの決意を表明する次第である。

参考2 大学の人事及び教授会の権限 日本学術会議声明 昭和24年10月6日
日本学術会議第4回総会
大学等学術研究機関の人事については学門、思想の自由を尊重することを念とすべきことについて(声明)
大学等学術研究機関の人事については、学問、思想の自由を尊重することを念とすべきであつて、単に政党所属等を事実上の理由として処置されるべきではない。
また、特に大学においては、学問の研究に關連する教授会の権限が尊重せらるべきであつて、これが、外部よりなる政治的理由によつて、左右されてはならない。
右、声明する。

参考3 大学の人事及び教授会の権限 日本学術会議勧告 昭24年10月12日
昭24年10月12日
内閣府大臣 吉田 茂 殿
日本学術会議会長 島山直人
大学等学術研究機関の人事及び大学の教授会の権限について(勧告)
大学等学術研究機関の人事については、学問思想の自由を尊重することを念とすべきであつて、単に政党所属等を、事実上の理由として処置されるべきではないと考えます。
また、特に大学においては、学問の研究に關連する教授会の権限が尊重されるべきであつて、これが外部よりなる政治的理由によつて、左右されてはならないと考えます。
本会議は、右の点について政府が慎重に考慮して妥當な処置をとられるよう第4回総会の議決に基き勧告いたします。

いる。この所内協議機関の委員は構成員の選挙によって選ばれている。機構内の研究者と全国関係研究者によって、文字通りの研究者自治を行っている。高エネルギー加速器研究機構にとって、内・外構成員の同意と創意による運営が研究を進める上で本質的に重要なことは言うまでもない。安倍内閣が目論む国立大学教授会権限の大幅剥奪による権限縮小はこれまでの国立大学の教育・研究機能を根底から破壊するものである。構成員の自主性を奪う学長権限の強化は、大学運営における学長独裁に至るであろうことは容易に推察できる。近代市民国家において、市民に支えられ、市民とともにある高等教育と学術研究の自主性をそれは根底から損ない、教育と研究の水準を低下させるばかりか、時の権力による教育・研究の歪曲・支配を生み、国家の将来を損ねる。歴史がこのことを教えている。報じられたところによれば、京都大学は総長選挙を従来のやり方に従って行うことを確認したと伝えている。困難な状況が進行する中で、関係者の良識が力を発揮し、生きていくことを知る。

重ねて記す、安倍内閣が画策し、戦後の高等教育を支え守ってきた大学の自治を破壊する、“学校教育法・国立大学法人法改悪案”は日本国の将来を損ねる施策である。改悪案に断固反対する。

(2014年6月26日 記)

終戦直前における多間隊の回天特攻作戦

—回天の中ですすり泣く少年—

中村 恵一(土浦市在住、元農研センター)

1.はじめに

終戦となる1ヶ月前の1945年の7月~8月にかけて、人間魚雷・回天を伊号潜水艦に搭載をして、サイパン、レイテ、沖縄を結ぶ中間地域・西太平洋において、敵国・アメリカの戦艦が通過するのを待ち受けて、潜水艦から回天を突入させ、敵艦の撃沈を狙いとして、多間隊による回天特攻を編成・実施したのである。

回天の訓練基地である大津島、光、平生から、6隻の伊号潜水艦(53、58、47、367、366、363)に、35基の回天を搭載する形で多間隊が編成された(表1、2参照)。7月14日~8月8日に、それぞれの基地から搭乗員と整備員(各回天に1名)が、仲間の盛大な見送りを受けて出撃したのである。

しかし、この頃(戦争末期)になると、敵国・アメ

リカによって、硫黄島は3月26日、沖縄も6月23日に占領され、日本の近海にアメリカの潜水艦や駆逐艦が押し寄せており、日本の潜水艦が西太平洋に向かっての移動に対して、爆雷や航空機からの攻撃を受けることが多くなり、ジクザク進行、昼も夜も潜航する形での移動は、言語に絶する日々であった。

多間隊による6隻の潜水艦のうち、敵艦に回天を突入させたのは、伊号53潜、伊号58潜、伊号366潜である。伊号47潜、伊号367潜、伊号363潜は、回天を突入・発進させることなく、それぞれの訓練基地に帰投した。

この戦争末期に、潜水艦で出撃した回天搭乗員、とくに甲飛13期の予科練(土浦・奈良)出身の少年たちについて、その苦悩や葛藤を、米寿まで生きながらえた予科練出身の元隊員として、「命より大事なものは無い」という思いで、仲間の鎮魂と日本の平和を祈念して、私なりの回想を試みた。

表1. 終戦直前における回天特攻・多間隊
A. 回天を突入・発進させた潜水艦

潜水艦(伊)	出撃		回天搭乗員				出撃回数	突入月日	備考
	基地	月日	氏名	階級	出身	年齢			
53	大津島	7・14	勝山 淳	中尉	海兵73	21	1	7.24	駆逐艦「アンダーヒル」を撃沈
			関 豊興	少尉	明治学	22	1	8.4	午前2時30分頃爆雷攻撃を止めるため突入
			川尻 勉	一飛曹	土浦空	17	1	7.27	午後1時頃大輸送船団をめぐって突入
			荒川正弘	一飛曹	土浦空	21	1	8.4	午前3時32分頃爆雷攻撃を止めるため突入
			高橋 博	一飛曹	土浦空	20	1	—	爆雷攻撃で機器故障、回天内で意識を失う
			坂本雅刀	一飛曹	奈良空	19	1	—	同上
58	平生	7・18	伴 修二	中尉	麻布獣	22	1	7.28	午後2時頃大型輸送船・駆逐艦に突入
			水井淑夫	少尉	九州大	23	1	8.9	午前8時すぎ近づいてきた船団に突入
			林 義明	一飛曹	奈良空	19	1	8.12	午後3時18分大型艦を発見、5時58分突入
			小森一之	一飛曹	奈良空	19	1	7.28	午後2時31分頃突入
			中井 昭	一飛曹	奈良空	18	1	8.9	午前8時輸送船団・駆逐艦に突入
			白木一郎	一飛曹	奈良空	18	1	—	冷走、発進中止
366	光	8・1	成瀬謙治	中尉	海兵73	21	1	8.11	突入
			鈴木大三郎	少尉	予備学生	1	1	—	機械故障・・・「恥ずかしくて帰れない」
			上西徳英	一飛曹	奈良空	18	1	8.11	突入
			佐野 元	一飛曹	奈良空	18	1	8.11	すすり泣く声・・・そして「パンザイ有難う」突入
			岩井忠重	一飛曹	奈良空	1	1	—	ジャイロ故障

注：勝山淳は水戸中学出身である。土浦空は土浦海軍航空隊、奈良空は三重海軍航空隊奈良分遣隊

表2. 終戦直前における回天特攻・多間隊
B. 回天を突入・発進させなかった潜水艦

潜水艦(伊)	出撃		回天搭乗員				出撃回数
	基地	月日	氏名	階級	出身	年齢	
47	光	7・19	加藤 正	中尉	海機54	1	1
			桐沢 鬼子衛	少尉	予備学生	1	1
			久本晋作	一飛曹	奈良空	1	1
			河村 哲	一飛曹	奈良空	1	1
			石渡昭三	一飛曹	土浦空	1	1
			新海菊雄	一飛曹	土浦空	3	3
367	大津島	7・19	藤田克己	中尉	予備学生	2	2
			安西信夫	少尉	予備学生	1	1
			岡田 純	一飛曹	奈良空	2	2
			吉留文夫	一飛曹	土浦空	2	2
363	光	8・8	井上恒樹	一飛曹	土浦空	1	1
			上山春平	中尉	予備学生	2	2
			園田一郎	少尉	東京大	4	4
			石橋輝好	一飛曹	土浦空	2	2
久保吉輝	一飛曹	奈良空	2	2			
小林重幸	一飛曹	土浦空	2	2			

2.多間隊伊53潜による出撃

—最年少17歳の回天特攻—

回天特攻・多間隊の先陣を切って、大場佐一少佐が艦長を務める伊53潜水艦は、回天搭乗員の勝山淳中尉(海兵73期)、関豊興少尉(明治学院大)、荒川正弘一飛曹(土浦空)、川尻勉一飛曹(土浦空)、高橋博一飛曹(土浦空)、坂本雅刀一飛曹(奈良空)の6名と整備員6名が乗艦して、1945年7月14日午後、仲間の盛大な見送りを受けて大津島基地を出撃し、西太平洋(沖縄とレイテの中間地域)を目指して南下、7月20日バシー海峡東方海域に到着した。

7月24日午後2時過ぎ、米軍の輸送船団を発見し、総員位置に就け、「魚雷戦用意、回天戦用意」の号令が下った。しかし、方位角が120度で無理である(回天の方向転回は半径4~500mで簡単にできない)。しかし、搭乗員達が突入・発進を強く要請したので、

艦長は1号艇の勝山中尉の発進を決めた。午後2時25分頃に発進、40分後の午後3時15分頃爆発音が響いた。これは戦後確認されたことだが、駆逐艦「アンダーヒル」は勝山中尉の人間魚雷・回天に突入され、真っ二つに割れて沈没したと、生き残った乗員が証言している。なおその乗員は、回天とは知らず複数の潜航艇の望遠鏡を見たという。したがって、勝山艇がアンダーヒルを追いかけて撃沈させたのであり、当に神業である。

7月27日午後1時頃、数十隻の大輸送船団のど真ん中にいた。いったん後方に脱出したが、離れすぎた。しかし回天搭乗員の強い要望があったので、川尻一飛曹の2号艇だけ発進・突入させた。1時間後に大音響をとどろかせた。川尻は北海道北見中学出身の17歳で、最年少の戦没搭乗員である。潜水艦から発進して、鉄の柵・回天の中で60分間、何を思ったのであろうか？ 走馬燈の如く浮かんだこと、終戦まであと18日であった。

8月4日午前0時30分頃、敵の駆逐艦から沢山の爆雷攻撃を受け、潜水艦が危険な状況となった。関少尉が回天を出させてくれと強い要請があったので、すべての回天に「発進用意」が命令された。午前2時30分、5号艇の関少尉が発進、さらに20分後、3号艇の荒川一飛曹が発進して行った。そして、3時30分、大爆発音が聞こえた。

高橋一飛曹の4号艇と坂本一飛曹の6号艇は、至近距離での爆雷攻撃によって機器が故障し、意識を失っていた。2人は艦内に収容され手当を受けた。かろうじて危機を脱した伊53潜は、8月7日頃帰投命令を受けて、8月12日大津島基地に帰還した。

高橋一飛曹と坂本一飛曹は、初めての出撃で仲間が発進・突入したのに、自分達は回天の中で気を失って、基地に連れ戻されてしまった。その思い・葛藤は、本人でなければ分からないことだが、激しい苦痛・ストレスがあったことであろう。やるせない思いである。

3. 多間隊伊 58 潜水艦での出撃

一生還はひとりだった白木一飛曹一

1945年7月18日、平生基地で訓練を受けた回天搭乗員6名、伴 修二中尉(麻布獣医)、水井淑夫少尉(九州大)、小森一之飛曹(奈良空)、中井 昭一飛曹(奈良空)、林義明 一飛曹(奈良空)、白木一郎一飛曹(奈良空)は、基地開設以来初めての出撃である。多間隊伊58潜の艦長は橋本以行少佐であり、グアムのアラブ港への泊地攻撃を経験したベテランである。荘厳な出撃の儀式がすんで、七生報国の鉢巻を締めた搭乗員と整備員6名も乗艦し「菊水マークの旗」、「非理法権天の幟」をたなびかせ、基地全体の盛大な見送り、とくに甲飛13期の仲間達は、どこまでも伊58潜を追って、島陰にかくれて見えなくなるまでついて行った。

伊58潜の任務は、フィリピン東方(西太平洋)海域での艦船攻撃である。7月28日午後2時頃、駆逐艦を従えた大型輸送船団に遭遇した。艦長は、目標が遠かったので、「回天戦用意!」、1号艇(伴中尉)と2号艇(小森一飛曹)だけに乗艇を命じた。午後2時31

分に小森一飛曹が「ありがとうございました」の言葉を残して発進・突入。次いで伴中尉が「天皇陛下、万歳」と声高に唱えながら、潜水艦を離れて行った。これは余談だが、伴中尉は空手が得意で、光基地での寮生活では、私も彼の鉄拳制裁を受け、4~5 m ぶっ飛ばされた。元気な良い青年であった。

7月29日午後11時頃、浮上したとき、水平線上に艦影を発見!、すぐに潜航して観測を続けた。艦影は潜水艦に真っ直ぐに向かってきた。「魚雷戦用意!」、魚雷6本を2秒間隔で発射、爆発音が3回轟いた。このとき、撃沈したのは、重巡洋艦「インディアナポリス」であることが戦後明らかになった。広島と長崎に投下した原子爆弾の部品を、サンフランシスコで積み、サイパンで降ろし、レイテ湾に向かう途中であった。

8月9日午前8時、輸送船10隻と駆逐艦3隻を発見、艦長は白木一飛曹に発進を命じたが、燃料点火せず冷走、発進を中止。林一飛曹の回天も故障したので、5号艇の中井一飛曹が発進した。さらに、新たな駆逐艦と船団が近づいて来たので、水井少尉の4号艇も発進して行った。

8月12日午後5時、大型艦を発見、「回天戦用意!」、故障の修理が出来た3号艇の林一飛曹が発進・突入して行った。これも戦後、米国のトーマス・ニッケルの戦闘詳報によれば、林艇が向かった相手は、上陸用舟艇母艦「オークヒル」であった。後方から追ってくる潜望鏡を発見して速力を一杯に上げ、左右に転舵して懸命に逃げ回る間に、護衛していた駆逐艦が回天に向かって突撃してきた。

林艇はこの駆逐艦「トーマス・ニッケル」に目標を転換して突入・命中した。この駆逐艦の乗員は、艦の横腹を「ゴリゴリ」と擦ってゆく異様な音響を聞いている。しかし回天はこの時爆発せず、少し離れてから大爆発を起こした。その衝撃で駆逐艦は片方のエンジンが使えなくなった。林一飛曹は敵艦との接触を認識し、冷静に自爆装置に手をかけた結果である。終戦は3日後であった。

8月15日夕方、伊58潜は沖縄の沖合から豊後水道に向けて北上中に、終戦の詔勅を聞き、8月17日、平生基地に帰り投錨した。整備員6名とたったひとり生還した回天搭乗員白木一郎一飛曹が、迎えに来た内火艇に乗り、基地に戻っていった。8月18日、平生訓練基地の回天特攻隊長橋口宏中尉(海兵7期)が出撃予定の回天の中でピストル自殺、「国体(天皇制国家)を護持できなかった」と、その責任をとったのである。

回天特攻の仲間を失って、ひとりぼっちになって、平生の訓練基地に戻った白木一郎。正義の戦争が終わったのである。敗戦のどさくさの中で、福岡県の故郷に帰った彼の消息を知る人は少ない。1949年頃に亡くなったようである。国のため、予科練・回天特攻で懸命に生きた少年の姿、その苦悩や葛藤を思うと哀れである。戦争は無慈悲である。涙が止まらない。

4. 多間隊伊366潜水艦での出撃

一回天の中ですすり泣く少年一

1945年8月1日、光基地で訓練を受けた回天搭乗

員5名、成瀬謙治中尉(海兵73期)、鈴木大三郎少尉(予備学生)、岩井忠重一飛曹(奈良空)、佐野元一飛曹(奈良空)、上西徳英一飛曹(奈良空)と回天の整備員5名、5基の回天を搭載して、基地全体の盛大な見送りを受けての出撃である。

艦長は時岡隆美少佐である。沖縄とウルシーを結ぶ西太平洋に向かって南下した。そして8月11日、米軍の大輸送船団と遭遇、非常ベルが鳴り響き「総員戦闘配置につけの号令が下り、潜航を開始した。そして「回天戦用意！」である。

艦長は先任搭乗員の成瀬中尉を司令塔にと指示があり、伝声管で伝えられた。顔面蒼白、唇をぐっと咬み締め、上がってきた。艦長は思いやりの眼差しで成瀬中尉の顔をじっと見ていたが、諭すような口調で「征くか」と言われた。「ハイ征きます。戦果を期待して下さい。皆さんの武運長久をお祈り致します。ありがとうございました。」はっきりした挨拶をして、タラップを下りた。艦長も俺達も断腸の思いである。俺は送りながら涙がホホを伝わり、顔がクシャクシャになった。(この記事は、「宮田信号長の手記」、伊366潜 鉄鯨会、会報第8号による。)

「回天戦用意、搭乗員乗艇」、回天との電話連絡は、1・2号艇は紅谷兵長、3・4号艇は岡部兵曹、5号艇は近藤兵長である。そして、「2号艇故障(鈴木少尉)」、3号艇ジャイロ故障(岩井一飛曹)である。

4号艇に針路と全没秒時を知らせている時、何か小さな声が聞こえてくる。佐野兵曹のすすり泣きの声だ。まだ18歳、若くして国の為、陛下の御為として志願して今日に至ったのであるが、死を直前にすれば誰でも同じ事である。俺だって直面すればきっとそうなる事だろう。俺の胸のうちは非常に切なくなってきた。出来れば彼を回天から降ろしてやりたい気持ちになってしまった。・・・「4号艇発進用意よし」急に元気な声が耳元で叫んだ。「エンジン始動」と艦長。ガガカー・・・「発進」ゴトン・・・バンドが外され、4号艇は本艦を離れた。「バンザイ！有難う」の声を残して、電話線はプツンと小さ

な音と共にちぎれた。5号艇も轟音を残して発進していった。(この記事は「信号員岡部兵曹の手記」、伊366潜鉄鯨会、会報第8号による)

8月15日まで敵艦に遭遇せず、終戦の詔勅を聞いた。8月18日昼頃、2基の回天を背中に、2名の回天搭乗員、5名の回天整備員は大津島基地に戻ったのである。鈴木大三郎少尉は、生還したことが「恥ずかしくて帰れない」と潜水艦から降りるのを嫌がった。

1945年12月、終戦から4ヶ月が過ぎた。長野県で元回天搭乗員15名が上山田温泉「清風館・別館」に集まった。忘年会である。ドテラを着込み、皆で肩を組んで温泉街をねり歩き、氣勢を上げたのである。その時集まった仲間の大部分は大神基地関係者だったが、潜水艦で出撃し、生還した小林重幸(轟隊と多聞隊の2回)と岩井忠重(多聞隊)がいた。岩井だけは、誰よりも自分の存在をアピールするような行動をとり、はしゃぎすぎる存在であった。出撃の時の拳銃を持ち帰ったこと、ジャイロ故障で生還したことなどもである。その後、開催された長野県回天会で、彼の姿を見ることはなかった。1965年頃に早世したのである。彼も、一緒に潜水艦で出撃し、敵艦めがけて発進・突入して行った予科練の仲間(奈良空)のこと、ひとり生還したことに対する苦悶・葛藤が終世つきまとったことであろう。これが国のために戦った若者の姿である。

参考文献・資料

- 1.全国回天会:まるろくだより.第1~58号.1994年5月~2009年1月.
- 2.全国回天会名簿.1993年
- 3.鳥巢健之助編:回天.回天刊行会.1980年
- 4.橋本以行:伊58潜帰投せり.2001年.学習研究社.
- 5.横田 寛:あゝ回天特攻隊.光人社.1994年.
- 6.伊366潜鉄鯨会.会報第7号(1989年).第8号(1990年)

[第17回 講演と対話のつどい]

日時：2014年11月16日 [日] 13:30~16:30 (13:00 開場)

開場：つくば市大穂交流センター 視聴覚室 (2階)

講演：田中重博 氏(茨城大学名誉教授)

『今、なぜ地方自治か?! / ~地方自治をめぐる諸問題~』 (仮題)

どなたでも、ご自由に参加できます (入場無料)

主催：筑波学園都市研究所・大学関係9条の会

関連団体の活動



「学習会」

～秘密保護法廃止のために今何を～

講師：田村武夫氏(元茨城大学教授)

2014年9月30日(火)13:30～

春日交流センター2階大会議室

(資料代:200円)

主催：秘密保護法の廃止を求める
ネットワークつくば



憲法9条の会つくば『9周年記念のつどい』

2014年10月5日(日) 12:30 開場/13:20開会

会場：つくば日ピオホール / 資料代: 1000円

タイムスケジュール

- 13:20 - 13:30 オープニング
太鼓演奏
- 13:30 - 13:45 活動報告
- 13:45 - 14:00 「憲法と私」
賛同人の発言
- 14:00 - 14:15 ミニコンサート
フォルクローレ
- <休憩>
- 14:25 - 15:55 記念講演
「今こそ、日本国憲法を生かそう」
伊藤真さん
- <休憩>
- 16:05 - 16:30 質疑応答



主催：憲法9条の会

研学9条川柳



☆ 条文に 情あふれて 67年

戦中派 嘘に残る 荒れ野原

風樹木 (牛久・森川)

☆ 人類の 進歩の証 わが憲法

反戦の 誓いの言葉 汗を止め

おさむ (牛久・平松)

☆ 子や孫を 人殺しには させないぞ

佐藤忠一 (土浦)

川柳で 捕えられそな 時がくる

つる・しがき (つくば)

☆ (2014年憲法フェスティバル・川柳大会入選句)



『憲法9条牛久の会』8周年記念のつどい

2014年11月1日(土) 12:30 ~16:00

会場：エスカードホール/ 資料代: 500円

(牛久駅西口イズミヤ牛久店4階)



主催：憲法9条牛久の会

事務局だより

◎ 9条の会ニュースの配布は、アドレスを登録されている方には電子メールで、それ以外の方には郵送しています。

◎ ニュースの原稿を募集しています。
1200~1500程度でお願いします。

本会では「筑波研究学園都市研究所・大学9条の会アピール」への賛同署名をお願いしています。

これまでの賛同者数 833名

2014年8月31日現在

◎ 「会」へのお問い合わせは

安田公三 : TEL/Fax : 029-847-3884

武田 潔 : e-mail: kiyogeta@yahoo.co.jp